
FPC!K!K!

セールス・マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F P C ! K ! K !

【Nコード】

N 3 6 1 5 S

【作者名】

セールス・マン

【あらすじ】

習作。現在途中までなので後ほど書き足します。2月に逝去なさったトウラ・サターナ様に捧ぐ……女3人、まかり通る。理不尽な暴力描写で埋め尽くされた物語ですので、そういった表現が苦手な方は申し訳ありませんがご遠慮ください。

「そんなこと言ったって仕方ないでしょ。いい？ また掛けるから」
背凭れに身を投げ出したチャロは、手にしていた携帯電話をぽんとシートに落とした。ビニールの座面の上でiphoneは数度軽快に跳ね、待ち受けに戻る。電話帳の一番上に乗っている男は、今頃手の中にあるお揃いの機種をしょんぼりと見下ろしているのだろう。自業自得と言う言葉も知らず。やあね、とため息交じりに天井を仰いだチャロに、ハルは象牙のようになめらかな手で緩やかにウェーブした黒髪を掻き上げ、そんなものよ、と返す。

「それでも付き合ってるあんたが悪いんでしょ」
「あんたに何が分かるってのよ」

チャロが注文したアイスクリームはトリプル。一番上のミントの半分ほどは胃に収められ、残りは通話の間に溶けてすぐ下のバニラはおろか、最下層のチョコレートすらも汚れている。ピンクのスプーンを崩れかけた緑色へ乱暴につき入れて掬うと、彼女は大きく口を開けてそれを舌の上に運んだ。小粒の前歯、溶ける毒々しいろのクリーム、唾液に濡れたプラスチック、こくりと上下する喉の動き。最後に小さく出された舌先が、薄い唇を拭った。凝視している事を隠そうともしないハルに、チャロは嫌悪の表情を浮かべた。

「レズのくせに」

「だからこそ男のこともよく分かるの」

こちらはもう既に片付いたアイスクリームのカップを脇へ避け、ハルはテーブルに身を乗り出した。

「そんな男別れたら？」

「で、あんたと付き合うの？」

うえっ、と肩を竦めるチャロに、眉を少し下げる人の良い笑みを浮かべる。

「自惚れんのも大概になさい」

堅苦しい学校から解放される放課後、青いワイシャツのボタンは二つ開け、紺のスカートの腰周りは二つ折り。最近入ったらしいアイスクリームショップのアルバイトは、にきび面をした同年代の少年だった。それほど大きくないハルの胸、ネクタイまで外してしまつたチャロの胸にまで視線を注ぐくらい、欲求不満らしい。

「あら、もう電話終わったわけ？」

Fカップのたわわな胸を揺らしながら登場したバーサの胸の谷間を覗き込んでいる姿を鼻で哂う。もっとも彼女の場合、胸だけでなく尻やふとももに至るまで、身体の全てにむっちり肉が詰まっている。チャロもまあ、背は低いがそこそいい体をしているけれど。どすんと乱暴に隣へ腰を下ろしたバーサの横顔を見ながら、ハルは考えた。寝るんだつたらバーサのほうがいい。そんな機会は一生涯ないのだとしても、値踏みはタダである。

まだ濡れた手に頓着することなく、バーサは放置したままだったアイスクリームを食べ始めた。ストロベリーが二つ。彼女はどんな菓子を買うときでも、ストロベリー味を選ぶ。

「あんな彼氏捨てちゃいなよ。顔だけがとりえじゃん、正直それもビミョーだし」

「そんなことない」

本日二回目の勧告を受け、チャロは神経質そうに眉を顰めた。

「優しいのよ、私にだけ。喧嘩も強いし頭も悪くないし」

「それにキュートなお尻」

ハルが混ぜ返せば、バーサがあはつ、と品のない大声で笑う。

「それは言えてる」

「言えてない……言えてるけど、関係ない」

チャロは短い髪の向こうから、不機嫌そうに唇を尖らせた。学校のシスターに見せてやりたい。成績もよく、猫を被っている優等生が見せる子供のような仕草は、日々溜まるフラストレーションの反動は、甘いものと放課後の活動へ如実に現れていた。

「可愛いだよ」

「で、今日は何？」

通路へ倒れそうなラクロスのラケットを引き寄せ、バーサは氷のような薄青色の瞳を興味の色に染めた。頭を上げた拍子に、まとめた茶色の髪が長い首筋を擦るよう肩へ流れる。

「また警察沙汰？」

「ううん、でもドジったみたい」

どろどろに溶けたバニラアイスとチョコレートアイスのスプーンでこね回し、チャロは首を振った。

「クラスメートを車のホイールキャップで殴ったのがバレたって」

二人分の感嘆を受け流しているふりをして、全然偽れていない。チャロは今混ぜ合わせているアイスクリームと同じ色の眼で、日も暮れつつある通りを睨んでいた。郊外に建てられた女子高の生徒をターゲットにしたアイスクリーム・ショップの周りにある商店は、他に薬局と小さなデリカテッセン程度のも。もう少し歩けば公園もあるが、寂れていると言っても良いほどの通りを歩くのは今の時間、買い物帰りの主婦くらいのもだった。中流以上の人間しか住まない住宅街のど真ん中、それほど柄の悪い人間が多いわけではない。店のターゲットである人種を除いて。

「相手の親が、学校と警察には連絡しないって言ってるらしいけど」
「じゃあ問題ないじゃん」

バーサが焦れたように、また髪を手で梳いた。

「何か面白いことがあったから電話してきたんじゃないの？」

「泣き言よ。親に殴られて、部屋に監禁されてるんだって」
「だっさい」

ふんと鼻を鳴らし、細く剃った眉を吊り上げる。クロスを置く場所が結局決まらなかつたらしい。柄の部分で、テーブルをこつこつと叩いてリズムを取っている。

「ほんとだっさい」

「今から抜け出すから、家に行ってもいいかって聞かれたんだけど」
まだ眉間に皺を寄せたま、チャロはそっぽを向いた。

「お断り。今日は排卵日だから」

クロスとテーブルのぶつかる音が、一瞬止まった。チャロは気付いていないのか無視しているのか、視線を逸らしたままだった。ハルが振向くと、バーサの口元は一瞬の引き攣りから辛うじて脱しようとしている。何とか元の形状に戻ったのもつかの間、ふつくと官能的な唇は、やがていやらしい笑みの形に変化した。残像を名残惜しみながら、ハルは無意識に肩を竦めると、つんと顎をそらしたままのチャロへ向き直った。

「甘えん坊ってわけ」

「あんた、絶対将来苦労するわよ」

ハルの取り成す言葉をかき消すように、バーサが甲高く作った声を上げる。

「ヒモにたかられたりしそう。そんな男やめちゃいな。いつそハルと付き合ったほうがマシじゃない？」

「やだ、何であんたまでそんなこと言うわけ？」

けらけらと女子高生そのものの笑いがテーブルを支配する。まだべたつく唇から発せられたそれは、元凶となるアイスと同じくらい甘ったるく、冷たいようにハルには感じられた。

「でさ、こっちは面白い話」

一頻り笑った後、バーサがテーブルに身を乗り出した。重たげな胸がぐつとせり出され、天板の上でたわむ。

「さっきトイレに行ったとき、聖トマス高校の奴にコナ掛けられたんだけど」

「どんな奴？」

気だるげに眼を細めたチャロも、勿論興味を持っている。ハルも黙って頬杖をつき直し、窓の外に視線を走らせた。

「うーん、ヒョロくはないけど、アメフト部って感じでもないし」

「あそこの車で待つてる奴？」

駐車場の赤いフォードに収まっている男を顎でしゃくると、バーサはそうそうと頷いた。

「あいつ。運転席に座ってるほう」

「助手席にいるのも、似たり寄ったりって感じね」

首を伸ばしたチャロが言った。

「で、友達を呼んでくるって？」

バーサはにたりと笑っただけで答えなかった。

「いいんじゃない、お誘いに乗ってあげても」

ハルは格段興味を持つでもなく相槌を打った。言いながら、手はもう床の鞆を掴んでいる。

「待ちくたびれてるみたいよ」

ガラス越しに柔らかく微笑めば、運転席に座っていた男がそれ以降こちらを凝視する。馬鹿みたい。そう思ったが、暇潰しには丁度いい。もう立ち上がっているチャロも、クロスを握り締めたバーサも同じことを考えていることは知っている。態度が違っただけで。

「あんたは排卵日じゃないんでしょ？」

ぼんとハルの背中を叩いたバーサが元氣よく言った。

「あ、どうせ何もしないか」

運転席に座る濃いブロンドの男はション、茶色い髪の方はデヴィッドと名乗った。アイスクリーム・シヨップを出発して30分。住宅街から離れた車は、まばらな草の生えた川べりに停車していた。日も落ち、紫の闇に包まれたこの周辺は車道から外れ、近隣では格好のデートスポットとして知られている。幸いなことに先客はおらず、月は遠慮気味な三日月。中古のフォードのボンネットが浅瀬の流れを反射して鈍く光っていた。

「それにしても、頭良いんだね」

助手席に座ったチャロの膝を見ながら、ションが話しかける。

「聖コペイキン高校？」

「親に勧められただけ」

彼女だけにしかできない壮絶な流し目をくれてやり、チャロは軽く喉を逸らして後部座席に語りかけた。

「あんたもそうでしょ？」

「ええ、まあね」

ウィンドウに頬杖をついたハルが頷いた。

「それだけ。みんな同じよ」

「聖トマスの方が学力上じゃん」

デヴィッドを挟んだ向かい側に陣取るバーサも、甘ったるい声を上げる。

「あたし、インテリって大好き」

「僕はバスケットボール」

腕に押し付けられた胸を明らかに意識しながら、デヴィッドは声を上ずらせた。

「で、シヨーンは水泳を」

「文武両道ってわけね」

彼の眼は、絶妙のタイミングで微笑んだハルの顔に向かう。

「すごい」

「水泳ってことは、泳げるのね」

シートから身を乗り出したチャロが、シヨーンの目を覗き込んだ。彼の位置からは、シャツの襟から見えたオレンジのブラも胸の谷間も、軽く持ち上げた膝のおかげで流れるスカートも、全部見えているに違いない。暗闇の中、その視線がどこに向けられているかは、後部座席からは知ることができなかった。

「どれくらい？」

「一日に5キロくらいかな」

シヨーンの唇が微かに震えている。ハンドルに乗っていたはずの手は膝に滑り降り、今にも飛び出そうと隙をうかがっていた。

「どうして？」

「泳ぐの、見たいから」

ピアノを嗜むチャロの長い指が、かたく握り締められた男の手に伸びる。ちらりと向けられた先にある川は流れも緩やかで、少なくとも見かけだけは生活排水に汚されている気配はない。

「泳いでる男の人ってセクシーだし」

助手席のドアが開く。初夏の夜風が車内に吹き込み、蒸れている空気を一気にかき回してくれた。少し名残惜しそうなそぶりを見せたものの、ショーンもまだ期待を捨てたわけではないようだった。最後にもう一度、じっとりとした目つきでチャロを見つめ、運転席から降りた。

「あ、あたしも見たい」

バーサはまだ、胸がむかつくほどの猫なで声を崩さない。ハルもとやかな動きで、そっとデヴィッドの腕を取る。

「行きましようよ」

フロントガラス越しに、服を脱ぎ始めたショーンを確認する。水泳部とは嘘ではないらしく、肩の筋肉はよく発達している。バーサが鞆から取り出しているものにデヴィッドが視線を注がないうちに、ハルは彼の手を引いて車から降りた。

「うわあ、すごい」

可もなく不可もないボクサーショーツ一枚になったショーンに、うつすら笑みを浮かべたチャロが近寄っていく。彼女が歩きたび、せせらぎの音に混じって、砂利を踏みしめる音が闇に響く。

「クロール？ バタフライ？」

早い、と思ったのは恐らくハルとバーサの両方だった。いつもはじっくりと言葉を交わして緊張を解くチャロがこんなにも急いでいるのは、恐らくアイスクリーム・シoppで交わしていた電話のせいだろう。長い付き合いだから、二人は彼女の心中で蟠る微かな苛立ちも、ぼんやりだが察することができていた。

態度では見せる逸りも、動作には何一つ支障をきたさなかった。顔を上げたショーンの鼻先に、隠し持っていたバタフライナイフが突き付けられる。ジーンズがまだ足元に絡まっていることも幸いし、

チャロの蹴りはあつけなく青年を地面に突き転がした。

デヴィッドが驚いて駆け寄ろうとするのを腕ごと抱き込んで阻止したハルが顎でしゃくるよりも早く、バーサが折り畳み警棒を後頭部に叩きつける。膝を折ったデヴィッドを突き飛ばし、うつ伏せの背中をローファー履きの足で踏み躪れば、初めてハルが抗議の声を上げる。

「ずるい、あんまり痛めつけるのはやめて」

「あんたこそ、自分の彼女にやりやいいじゃん」

バーサは呆れたように顔をしかめ、手の中の警棒をくるくると回した。

「LでSって、サイテー」

「彼女にしたらSでDになるでしょ」
ドメスティック

茶色の髪を血でより濃く染め、デヴィッドはうなり声を上げている。彼にショーツが見えることなどお構いなしで、ハルは青年の傍にしゃがみこんだ。

「そんなの良くない」

黙って頭を振ったバーサがデヴィッドの背中に跨り、警棒でしっかり彼の首を抑えつけている間に、ハルがポケットの中から取り出した錐を青年に見せびらかす。

「私、ひいひいお爺さんがシチリア人だったのよ」

言い聞かせているとも独り言を呟いているとも定かでない口調で、彼女は青年の髭の剃り跡も濃い顎を切っ先でなぞった。

「だからこれの扱いは心得てるつもり」

夢みるような漆黒の瞳の奥で、今日初めて生気を煌めかせながら、ハルは逆手に握り締めた太い錐で、躊躇もなく青年の手の甲を貫いた。

背後から聞こえる潰れた絶叫など気にもかけず、チャロは白いソックスに血が飛ぶほどショーンを蹴り続けていた。

「頭が良いですって?!」

普段の艶やかな声を極限まで高揚さえ、芋虫のように丸められた腹へ集中的に爪先を叩き込む。

「ふざけんじゃないわよ!　うちの偏差値は、州内でワーストテンよ!」

「悪かった」

喘ぎ喘ぎ、シヨーンが何とか声を振り絞る。

「こんなとこ連れてきて」

「ほんとにそう思ってたの?　ていうか、謝って済む問題?」

最後の一撃で仰向けに転がした体へ覆いかぶさるよう身を屈め、顎を掴む。指を濡らすのは唾液か血か、恐らく2つが入り交じったものだろう。かざされた薄いナイフの刃が、いつの間にか雲に半分隠れていた三日月に輝いた。眼だけに激しい憎悪を湛えたチャロに、シヨーンは必死で縋りつく。実際、踏まれて骨が折れているかも知れない手を、彼女の制服の袖口に伸ばした。

「金なら渡すから」

「いない」

手を払いのけ、拭うように拳を眼下の顔に2度程走らせる。上下した軌跡に沿って、右の顎から眼の下にかけて赤い筋がぱつくりと開いた。シヨーンはもう、声すら出せないようだった。泣いているかどうかは分からなかったが、少なくとも上を向いた二つの黒い穴から鼻水が垂れている。面白くない。チャロは内心舌打ちした。自らの恋人の、微妙にしまりの悪い唇を思いだす。そこが可愛いし、大体彼ならば、たとえ警察官が飛んできたとしても、あの唇を不敵に尖らせていることができるに違いない。そういえば彼は何をしているのだろうか。電話を切られて、すっかりしよげきっているのではないだろうか。明日電話して、慰めてやらなければ。

ぼんやりと弄っていたナイフの刃先は、浅く青年の顔を傷つけ続けている。これでは失礼だと思い、踏みつけていた掌から足を離す。「泳げるって言ってたっけ」

肉が割れている頬を指で撫でると、低いうめき声上がる。ついでにオレンジ色のマニキュアを塗った爪を食い込ませれば、悲鳴に変わる。彼氏のものとは似ても似つかないエメラルド色の瞳は、やはり涙で潤んでいた。

「何なら、泳いで逃げてみる？」

手を離せば顔が落下し、額を地面にぶつける。チャロは三步後ずさり、両腕を組んで待ち構えた。男はなかなか動かない。爽やかな水音に混じり、背後から聞こえる呻きと、ハルの囁き声が、霧の出だした川原を支配している。あと10数えても起き上がらなかつたら、手助けして水の中に蹴込んでやろう。湿気のせいでべたりと寝てしまった髪を無造作に払い、チャロは青年の動きを見守っていた。幸か不幸か、シヨーンはタイムアップ寸前に肩を震わせた。そろそろと首を持ち上げ、チャロの顔を見上げる。先ほどはすっかり消えていると思われた生気は、瞳の中に再び戻りつつあった。思ったほど意気地なしというわけでもないらしい。

シヨーンは彼女と見詰め合ったまま、ゆっくりと立ち上がる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615s/>

FPC!K!K!

2011年4月10日00時10分発行